



企画にあたって

荒井秀典

(国立長寿医療研究センター理事長)

2019年に28.4%であった高齢化率は、2025年には30%を超えることが予想されている。平均寿命の延伸が認められるなか、今後は75歳以上の高齢者が増加し、2040年ころには国民の25%が75歳以上となり、約1割が85歳以上となる。元々高齢化が進んでいる循環器疾患を有する患者はさらに高齢化し、高齢化に伴うさまざまな問題を合併することが多くなり、その管理の困難さは日に日に増している状況である。すなわち、循環器疾患以外の臓器疾患の合併（多病）、それに伴う多剤併用（ポリファーマシー）は多くの患者において問題となり、認知機能の低下、フレイル、サルコペニア、転倒・骨折、尿失禁、うつ、低栄養など高齢者の特徴である老年症候群の合併が増えてくる。このような複雑な病態を呈する高齢者の診療において質の高い診療を実践するためには、若年者とは異なる管理法（例えば栄養管理）が必要になることもあり、生活を支える日常生活活動や社会的側面についての理解も必要となっている。

このように超高齢社会となったわが国においては、若年期から循環器疾患の予防を行うことはいうまでもないことであるが、循環器疾患を合併したあとの管理において、疾患管理とともにこれらの老年症候群への対応がきわめて重要であり、その包括的な管理が患者のQOL維持に重要となっている。

このような背景から、循環器の専門医においても循環器疾患そのものへの適切な管理に加えて、高齢者の特性を理解し、生活機能や老年症候群の簡便な評価についてその意義を理解し、実践することが求められている。また、在宅療養やエンドオブライフケアについての理解も必要である。

本企画においてはこのような時代的背景を踏まえて、高齢循環器疾患患者の管理を行ううえでのさまざまなアプローチを学ぶことができる内容になっている。本書を理解し、実践することが必ず高齢循環器疾患患者の健康寿命の延伸、QOLの向上につながることを願っている。